

## 優秀賞

### ばあちゃんが教えてくれたこと

山形県 第六中学校 二年 土屋 花音

「ばあちゃん、こんにちは。」

私はこう言って、いつもと同じように玄関の戸を開けた。

私の家の向かいに一人暮らしのばあちゃんが住んでいる。生まれて間もないころから祖父に連れられ、私は遊びにいていた。小学生になってからは、学校から帰るとすぐ、遊びに行くようになった。

ばあちゃんは、いつも自分の手料理をごちそうしてくれる。家ではあまり食べない山菜の煮物などがでてきたこともあった。幼いころから、ばあちゃんがつくってくれる手料理を食べていたおかげか、私は好き嫌いがそんなになく思える。

ばあちゃんがつくってくれた料理を食べて、「おいしいよ。」というとき、ばあちゃんは、「ありがとうね。」と返してくれる。こんなやりとりが日常的になっていた。

中学生になると、勉強や部活動が忙しくなり、遊びに行く回数が減っていった。そんななか、中学一年生の冬休み、久しぶりにばあちゃんの家遊びに行こうと考えていた。そして何か、ばあちゃんに喜んでもらえることをしたいと思った。

（私にできることは何だろう）と考えながら、一番最初に思いついたのが、雪掃きだった。私は小さいころから、自分から雪掃きの手伝いをしていた。だから、雪掃きはとても好きだった。これなら私にもできると思い、さっそく取りかかった。

雪がしんと降り積もる月であったが、寒さなどまったく気にならなかった。また、ばあちゃんの喜ぶ顔を思い浮かべると、疲れも吹き飛ばすようだった。

一時間ほど体を動かしたあと、雪掃きをしたことをばあちゃんに伝えた。すると、ばあちゃんは目を丸くして、「寒くて大変だったでしょ。」と、私の身体の心配をしてくれたのだ。私はとてもうれしかった。「ぜんぜん寒くなかったよ。」と答えると、ばあちゃんは玄関の戸を開け、外を見にいった。

私が掃いたところは自分が見ても、とてもきれいに掃かれていた。それを見たばあちゃんが、「こんなにきれいに掃いてくれたの。」と言い、私の手を強くにぎって「助かるわ、ありがとうね。」と言ってくれた。

ばあちゃんの手は、冷たくなっていた私の手を温めてくれた。と同時に、私の心まで温かくなった。ばあちゃんの手を見ていると、なんともいえない満足感、達成感があった。

まわりを見渡してみると、人のために自分ができると、期待されていることがたくさんある。そういう見方を大切に、少しの勇気を持ち、自ら行動に移したいと思う。

また、自分が親切にされたならば、感謝の気持ちを伝えることも大切だと思う。そうすることで、お互いが温かい気持ちになれる。大げさなことでも、小さな親切から始めていきたい。